茶ぐわ～ゆんたく 190

お茶を飲みながら、ぎのわんの歴史をのぞいてみませんか？

今も残る 野嵩ヌメー屋取の生活路

1939(昭和14)年、真栄原・志真志・長田・愛知・中原・赤道・上原の各屋取集落が旧集落から分離して、新たな行政区が設置されました。例えば、上原はもともと「野嵩ヌメー屋取」と呼ばれていましたが、字野嵩から石嶺原、字新城から上原と仲毛原、字喜友名から濡原といった小字が分離して設置されました。屋取集落とは、士族が首里から地方へ移住してできた集落のことで、上原の屋取集落は、1750年代に屋号奥間が首里から移住したことに始まります。その後、1830年代に屋号謝刈仲本らが入植して集落を築いたようです。

▲屋号謝刈仲本あたり
前を通る道がバサミチーでした。

上の写真は、謝刈仲本の屋敷があった場所です。屋敷の前は、バサミチーと呼ばれる道が通っていました。戦前の上原集落では、このバサミチーが普天満宮から続くいわゆるジノーンナンマチ(宜野湾並松街道：ケンドー)に次いで大きな道で、中城と同ケンドーを繋ぐ生活路でした。その名の通り、馬車が通れるほどの道だったと言うことです。

下の写真は、さらにケンドー方向(普天間飛行場方向)に進んだ場所です。この奥には左手に佐喜眞美術館があり、道は普天間飛行場のフェンスにさえぎられて行き止まりとなりますが、かつてはこの辺りにトロッコ軌道の起点があり、ケンドーに合流して大山駅までサトウキビの運搬を行っていました。佐喜眞美術館の前の道を挟んだ向かい側には、1940年代に村屋(かつての公民館)が建てられ、トロッコに積み込むサトウキビが一時的に置かれていたそうです。

上原は都市化が進みましたが、かつての生活路は部分的にその面影を残しています。

【問い合わせ】
市立博物館 ☎870-9317

▲トゥルックミチー
写真右手に村屋がありました。

はくぶつかんの部屋 54

宜野湾市の歴史や文化などを紹介します。

市立博物館
イメージキャラクター
天女ちゃん

普天間の移り変わる風景 ～ぎのわんの"字"展によせて～

市立博物館では、毎年市内各字の地域を中心とした地域の方々と連携し、「ぎのわんの"字"展」を開催しています。今回は、普天間にスポットを当てています。

戦前の宜野湾村は、字宜野湾に村役場や学校、マチグワー(市場)等があり、村の中心的な役割を果たしてきました。一方で、普天間には中頭郡役所や、中頭教育会館、沖縄県立農事試験場普天間試験地といった官公庁があり、中頭郡の中心的な存在でした。また、琉球王国時代には、国王や王府高官が普天間権現へ参拝する普天間参詣が行われるなど、門前町として栄えた所でした。宜野湾間切(間切…現在の市町村担当)の特徴を歌に詠んだ宜野湾口説では、「権現前なちょる　普天間村」と詠われています。

▲普天満宮と宜野湾並松
1938(昭和13)年頃
ティラヌメー(寺の前)には、宜野湾並松(じのーんなんまち)があり、抜群の光景でした。

戦前も普天満宮には、宜野湾以外からの参拝者もおり、沖縄県営軽便鉄道を利用して大山から徒歩や客馬車で訪れていました。ティラヌメー(寺の前)には、そば屋や雑貨店、旅館、写真館なども建ち並んで賑やかな町でした。

普天間は、普天間権現の西側に集落があり、碁盤の目のように家々が建ち並んでいましたが、沖縄戦後に米軍基地となり、かつての面影は残っていません。

また、普天間の民俗芸能には獅子舞があり、字普天間郷友会によって旧盆の7月13、15日や8月十五夜、普天満宮の旧暦9月の例大祭に演じられています。

今回の字展では、これまでの普天間の遺跡発掘調査で発見された遺物をはじめ、歴史、くらしの中で使われた民具資料等を紹介しています。ぜひ、この機会に足を運んでみてはいかがでしょうか。

ぎのわんの字展
権現前ナチョル、普天間ムラ展
期　間　3月1日(日)まで
時　間　9時～17時
(入館は16時30分まで)
場　所　市立博物館

【問い合わせ】
市立博物館☎870-9317

▲普天間の獅子舞
2019(令和元)年
ふてんま児童公園隣の字普天間郷友会事務所前広場で演じられた様子。普天間の獅子舞は市の無形民俗文化財です。